

## [研究ノート] ジンバブエ社会史研究の動向

著者	北川 勝彦
雑誌名	関西大学経済論集
巻	51
号	4
ページ	493-512
発行年	2002-03-15
その他のタイトル	[Notes] Recent Trend in Social Historiography of Zimbabwe
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/4504">http://hdl.handle.net/10112/4504</a>

## ジンバブエ社会史研究の動向

北 川 勝 彦

### 要 旨

本研究は、南部アフリカ、具体的にはジンバブエにおける都市社会史研究の動向を整理しようとしたものである。現代ジンバブエの都市の歴史は、パイオニア・コラム（遠征隊）がフォートソールズベリーを建設した19世紀末に遡ることができる。植民地支配に対する抵抗は時を移さず開始された。1896—97年の蜂起から1970年代の独立運動にいたるまで農村を舞台とする社会史については実に多くの研究が書かれてきた。ところが、農村社会史研究の陰でこれまで植民地時代の都市において生じた社会的および政治的変動について書かれたものは相対的に少なかった。ジンバブエの社会経済史研究においては、アフリカ人が都市化の過程で創り出そうとした空間、植民地国家の矛盾した対応、労働組織に対する農村—都市間関係の影響、人種や階級やジェンダーにそって行なわれた都市のマッピングなど、今後、都市社会史について取組まねばならない課題は多い。

キーワード：農村社会史、都市化、都市社会史、労働史

経済学文献季報分類番号 04-10、04-50、05-30、06-14、07-40、15-12

### 1 はじめに—南部アフリカにおける都市化の現状—

世界でもっとも都市化が遅れているアフリカ大陸のなかで、ザンビアや南アフリカの人口周密な都市にみられるように、南部アフリカの都市化は急速である<sup>1)</sup>。都市の立地と建設は、植民地時代の戦略上および通商上の事情によって、また、資源の所在によって規定されたが、南部アフリカにおける都市化の固有の性格は、この地域における労働移動の特質と広がりによって生まれてきた一面がある。その中でも農村—都市間労働移動は、重要な一要因である。都市移入民の間では、次第に都市内部に長く留まる傾向が見られ、その自然増が、人口増加の重要な決定要因となってきた。また、都市化には各国特有の諸要因が影響している。たとえば、南アフリカでは、1980年代における流入規制の撤廃や他の諸法律の変更は、疑いもなく都市化の形態と速度を変化させた。1970年代以降のアンゴラとモザンビークでは内戦が、ボツワナでは近年の経済ブームが何千という農村の人々を都市に流入させたのである。

南部アフリカには実に多様な都市の形態が見られる。ケープタウン、ダーバンおよびマブ

ト(ローレンソマルケス)のような港湾都市は典型的な「植民地都市」としてしばしばあげられるが、出稼ぎ労働(migrant labour)への依存を特徴とする鉱山活動の周辺に成長した都市もある。南部アフリカ地域の工業化以前の時代に起源を持つ出稼ぎは、鉱山都市に限られたわけではなく、ハラレ(ソールズベリー)のような政治と商業の中心地やダーバンやマプトのような港もすべて出稼ぎ労働に大いに依存してきた。キンバリー、ジョハネスバーグ、それにコパーベルトの鉱山都市と同様に、それらの都市では、第二次世界大戦後まで、男性の出稼ぎ民が支配的となる傾向が顕著であった。南部アフリカにおいて出稼ぎ労働が都市の家族や文化や生活に及ぼした影響は深く、持続的であった<sup>2)</sup>。

また、南部アフリカの諸都市における社会地理や政治文化は、植民地時代の地方政府の形態、行政、都市計画などによって形成された。それらのすべては独立後数十年がすぎてもわずかに変化しただけである。都市のデザイン、密度、アメニティなど植民地時代の都市計画では、人種間および階級間の分離や区分が際立っていた。植民地支配の象徴を誇示するにはコストがかかり、しかも、地方当局がこの人種に基く空間秩序を完全に実現する能力にも限界はあったが、独立後の南部アフリカ諸国の諸都市の経験をみれば、都市の形態は法律上の書類のサインだけでは変化しなかったことがわかる。現代の南部アフリカにおける社会の分断と階層化は、植民地支配の下で明白に人種差別化されたものと比べて厳格ではないにしても、広い範囲にわたって存続している<sup>3)</sup>。

このようにアフリカの新興独立国には、去り行く植民地国家によって多くの都市問題が残された。その後の数十年にわたって、これらの諸問題は、経済危機や政治と社会の変動がアフリカの諸都市を悩ますたびに複雑な形で現れてきた。たとえば、ザンビアは、1970年代の中頃に突然、石油危機と銅価格の崩壊のためにスクオッターの都市流入に直面した。1980年代のモザンビークでは、内戦の影響のために土地を失った大量の農村の人々が都市に押し出されることになった。1980年代末と1990年代初頭のジンバブエでは、構造調整政策のために都市人口の大多数を占める貧民がますます困窮する影響が現れた。現在、南アフリカの民主的に選出された政府は、都市のホームレス、貧困、失業、都市化の加速という途方もない問題に直面している。

都市化のレベルと経済発展の成功の間にはプラスの相関関係があると認められているが、因果関係の方向については意見の隔りがある。サハラ以南アフリカ全体を見た場合、急速な都市化にもかかわらず、都市が「成長のエンジン」を演じていないことは明らかである。都市の人口が増加するにつれて、インフラストラクチャーや行政に対する要求は少なくなるどころかますます大きくなり、経済成長と効果的な都市経営の両方に解決策が求められるようになっていく。かといって、国家の資源のうちで農村の貧民を犠牲にして都市に非対称的

なシェアを確保することを前提とするような議論が善をなすとはもはや言えなくなっている<sup>4)</sup>。

最近では、南部アフリカにおいて、広くアフリカ大陸において、アジアやラテンアメリカと同様に、都市開発、具体的には都市経営についての関心が高まっている。また、1990年代初頭以降、たとえば世界銀行や国連開発計画など国際機関の開発政策においては、「持続的な救済と開発」への理解と介入の努力のなかで都市に焦点をあわせる傾向がみられる<sup>5)</sup>。国際機関の政策が南部アフリカにおける都市開発にとって重大で、時には決定的な影響を与えるが、都市にかかる現実的なストレスは、政策の見直しを迫っている。

以上のような背景の下で、植民地時代の都市行政の遺産や独立後の都市改造の取組の歴史的研究が試みられるようになり、国際的ドナーの下での都市管理概念とその応用については批判的な検討が必要とされることがわかってきた。ところが、都市史研究は、都市空間の人種差別的な分割に影響を与えた「都市経営の哲学」や「都市デザインのイデオロギー」を理解する上で貧弱な思考の枠組しか残してこなかった。都市計画の指針となり、もっと広い意味での専門的知識や文化の歴史的理解に立脚した「計画する側」から見た都市の歴史が検討される必要があるだろう。他方、多くの人々が語るように、「計画される側」から見た都市の歴史も必要である。しかし、現実には、両方の見方は緊密に関連している。というのは、都市の政策当局は住民に対して単純に青写真を強要できないし、政策の実施には、交渉と闘争と協調が常に伴うからである<sup>6)</sup>。

この論稿は、南部アフリカにおける都市社会史研究の動向を整理するために、これまで筆者が書き留めておいたノートの一部である。1920年代末以降、アフリカにおける出稼ぎ、都市化、都市生活については、人類学、社会学および歴史学の研究の流れが現在にいたるまで続いている。そのような研究の中には、かつて行なわれたような村落—鉱山コンパウンド—都市の相互関係について事例研究の蓄積があり、それを踏襲する研究は現在でもみられる。また、1930年代から1960年代までの都市人類学の開拓者的な研究に加えて、最近20年間における都市の社会史や経済史の研究からもアフリカ人の都市生活に関する豊かな成果が著されているし、農村と都市の諸要因の相互関連についての理解も進んだ<sup>7)</sup>。

事実上、個々の研究者は「都市研究パラダイム」に自らを意識的に位置づけなくても、多くの社会科学研究では都市に焦点が当てられるようになってきた。こうした研究の傾向がはっきりしてきたのは、アフリカの各地を特徴づけている大きな経済的格差と社会的分裂が都市において顕著に見られるからであり、また、変動激しい20世紀後半においては人々の抵抗は基本的には都市的現象と考えられたからである。本稿では、考察の対象を南部アフリカのジンバブエに限定するが、それでも数多くの社会史研究をカバーすることなどとうてい不

可能である。したがって、以下では、まず、ジンバブエ社会史研究を代表するテレンス・レンジャー (Terence Ranger) の諸研究を概観し、次に、ジンバブエの労働史研究を紹介した後、最近のジンバブエ都市社会史研究のいくつかを検討する<sup>8)</sup>。

## 2 ジンバブエ社会史研究とテレンス・レンジャー

テレンス・レンジャーは、17世紀のアイルランド史家として研究生生活を開始した<sup>9)</sup>。彼の立場は、「アフリカ人史家に対して他の地域の歴史家によって開発された概念を紹介し、同時に英欧の歴史家に対してはアフリカ史に関心をもたせる」というものである。1987年に『過去と現在』(*Past and Present*) 誌上に発表されたジンバブエにおけるミッシヨナリーとアフリカ人によるキリスト教の聖地の占有に関する論文は、アフリカ史研究のフィールドワークとヨーロッパ文化史の研究から得た洞察力に基いて著された卓越した成果である<sup>10)</sup>。また、多くの人々が認めるように、レンジャーのアフリカ史記述の真骨頂は、「直接の引用を巧みに利用することでアフリカの人々に声を与える能力」である。そうした論文が数多く残されている。

ところで、レンジャーとジンバブエとの関係は、彼がリチャード・グレイ (Richard Gray) の後任としてローデシア大学に赴いたことに始まる。しかし、NDP (National Democratic Party) のメンバーとなったレンジャーは、南ローデシアの白人社会からは非難されたが、アフリカ人からは友人として迎えられている。スケッチリー・サムカンゲ (Sketchly Samkange) やハーバート・チテポ (Herbert Chitepo) などとともにナショナリストの政治に関与したことは、レンジャーがナショナリズムの歴史的起源の研究に進む契機となり、バシア・ニャバザ (Basia Nyabadza) やサン・フランシスのコミュニティに接したことでアフリカ人の宗教的独自性への自覚を高めた。このようにレンジャーの歴史的洞察力は、精密な文書研究だけでなく、彼の個人的経験、すなわち説明しようとする事件への自らの参加によって形成されたものであるという点を忘れてはならない<sup>11)</sup>。

1960年代、タンザニアのダルエスサラーム大学はアフリカ史研究の中心であった。レンジャーがいたこの大学には、数多くの優れた研究者が集まった。ジョン・サットン (John Sutton)、ジョン・ロンズデール (John Lonsdale)、ジョン・アイリフ (John Iliffe)、イザリア・キマンボ (Isaria Kimambo)、ウォルター・テム (Walter Temu)、ネッド・アルパーズ (Ned Alpers)、ウォルター・ロドネー (Walter Rodney)、アンドリュー・ロバーツ (Andrew Roberts)、ジョン・ソウル (John Saul)、ロジャー・ウッズ (Roger Woods)、ジョバンニ・アリギ (Giovanni Arrighi)、ライオネル・クリフ (Lionel Cliffe) など枚挙に暇がないほどである<sup>12)</sup>。1965年9月、ダルエスサラームでレンジャーを中心にしたアフリカ史国際会議が連続して開催されたことは広く知られている。また、大規模なアフリカ史教育者

会議が開かれ、その結果、「中央アフリカ史」、「タンザニア史」、「南アフリカ史」という3冊の編著が公刊された<sup>13)</sup>。

タンザニア在住の6年間にレンジャーは、実に多くの著作を書いたが、とくに時間を費やしたのは二つの著書であった。すなわち『南ローデシアにおける反乱』(*Revolt in Southern Rhodesia, 1896-97.*)は1967年に出版され、『南ローデシアにおけるアフリカ人の声』(*The African Voice in Southern Rhodesia.*)は1970年に出版されている。彼は、さらに東アフリカの植民地経験の現実を捉えるためにもっと広い地域の研究に関心を示し、東・中央アフリカのさまざまな地域の資料に依拠しながら、アフリカ人による教育、原初的抵抗、魔術の一掃運動の研究に取り組んでいる。こうした一連の研究は広い意味でアフリカ人の観念の動きを明らかにしようとしたものであった。そうした研究成果は、「キリスト教と伝統的信奉」、「薬品と癒し」、「首長の権威と民族のアイデンティティ」、それにダンス結社とポップカルチャーの研究など一連の開拓者的な研究論文をみればわかる<sup>14)</sup>。

1969年にレンジャーは、ダルエスサラームを離れ、12年間のアフリカ生活に別れを告げた。その後、UCLAのアフリカ史教授(1969—1974年)、マンチェスター大学の現代史教授(1974—1987年)、オックスフォード大学ローズ講座(人種関係研究)教授(1987—1997年)を歴任する。UCLA時代には、アフリカの宗教の歴史的研究に着手し、国際会議を開催しただけでなく、*African Religious Research*を発刊した。マンチェスター時代には、独立期をはさんで再びジンバブエに関心を向けている<sup>15)</sup>。また、オックスフォード時代には、数多くの大学院生を育て、新しい世代のジンバブエ史家の集団を作り上げた。その代表的な人物がヌグワビ・ベベ(Nguwabi Bhebe)である。

この間、レンジャーは自己の関心を向けた著作を次々と公刊していった。キマンボと共著の『アフリカ宗教の歴史的研究』(T.Ranger and I.Kimambo eds., *The Historical Study of African Religion*, London, 1972.)は、アフリカの宗教を歴史として研究する出発点となったものである。『ジンバブエにおける農民意識とゲリラ戦争』(T.Ranger, *Peasant Consciousness and Guerrilla War in Zimbabwe*, London, 1985.)は、1980—81年のマコニ地区での農民研究の草分け的な成果であった。『俺たちも同じ男じゃないのか：サムカンゲ一家とジンバブエのアフリカ人政治』(T.Ranger, *Are We Not Also Men : The Samkange Family and African Politics in Zimbabwe, 1920-64*, London, 1995.)は、サムカンゲ一家のジンバブエ政治とのかかわりを歴史的に研究したものである。ベベと著した二つの編著『ジンバブエの解放戦争における兵士』と『ジンバブエの解放戦争における社会』(N.Bhebe and T.Ranger eds., *Soldiers in Zimbabwe's Liberation War*, London, 1995. N.Bhebe and T.Ranger eds., *Society in Zimbabwe's Liberation War*, London, 1996.)は、20世紀のジンバブエ史研究者

が到達した研究水準を如実に示している。さらに、最も新しい成果である『岩からの声：ジンバブエのマトポの丘における自然、文化および歴史』（*Voices from the Rocks : Nature, Culture and History in Matopos Hills of Zimbabwe*, Harare, 1999.）は、レンジャーの積年の成果であり、ジンバブエの農村社会史研究に新地平を開くものである。

レンジャーは、アフリカに関する研究を著し始めたもともと初期から今日にいたるまで、自らの著作でアフリカの人々をポジティブに評価する態度を貫いてきた。たとえば、1896—1897年のチムレンガ蜂起において白人に敵対して武力抵抗を行なったマシヨナランドのシヨナ人が全面的に関与したと主張したところにもそれはあらわれている。また、彼は、食糧市場への参入を企てたシヨナ人の農民たちが農民生産の可能性を最大化するために採用した多くの戦略にも言及している。さらに、彼の研究したトンプソン・サムカンゲ（Thompson Samkange）は、卓越した民主主義者であり、ナショナリストたちの統一と市民的諸制度を自らの手で樹立する信念を結びつけた人物として高く評価されている。加えて、階級を越え、アフリカ人同士の争いを最小限におさえた解放闘争期において「急進的な農民意識」の存在を強調したのもレンジャーであった。

レンジャーがポジティブな面を強調したからといって、彼は決して20世紀のアフリカ史研究が必要とした詳細な批判的分析を排除してはいない。『南ローデシアにおける反乱』において1896—97年の抵抗の統一性と広がりが増大されているという批判はあるにせよ、ジンバブエの農村経済における農民の「小農化」（peasantification）の利害得失を最初に説明したのはレンジャーであったし、アフリカ人のナショナリズム運動についてその不統一と達成の両方を説明したのも彼であった。

レンジャーの研究で重要なのは、アフリカの人々や彼らの作り上げてきた社会の肯定的側面を強調している点である。過去を生きてきた人々に対して持前の想像力を発揮して同感をよせ、肯定的側面を強調している点こそレンジャーの研究の立場を如実にあらわしている。今では当然のごとく語られるようになった「アフリカ人のイニシヤティブ」や「歴史のエージェントとしてのアフリカ人」を強調する方法態度はレンジャーに始まる。他方、こうした態度は、聖者伝説に陥りがちであるが、レンジャーの場合には、アフリカの人々が何を考えたかについての洞察と何をしたかについての記述が巧みに結ばれ、その結果、実に豊かなアフリカ人の経験の説明が織り上げられている。

人民の抵抗を形成する上でアフリカ人の固有の宗教的信念の体系が重要であるとの主張は、今日では広く受け入れられている。それは、他方、バジル・デビッドソン（Basil Davidson）のテーゼ（ゲリラ戦の経験が迷信、宗教、伝統主義、ユートピア主義の農民文化から合理的、近代的、世俗的、社会主義の思考様式に移行させる）が拒否されたこととつながる。したが

って、レンジャーの方法態度は、どこか他のところで定式化されたイデオロギーをアフリカ人に課すのではなくて、アフリカに普通に暮らす人々の信念のシステムについて深い理解を示すというものなのである<sup>16)</sup>。

レンジャーは、常に積極的に理論的な論争に加わってきた。最近でも、「伝統の捏造」、「エスニシティの想像」、「市民社会」、「ポストコロニアルの言説」などの諸概念をめぐる論争にかかわっている。こうした論争は移ろいやすいものであるが、レンジャーのアプローチは不変である。彼は、新しい概念には時を移さずに反応を示すが、すべてを包み込むような理論的モデルに屈服はしない。基本的に一貫しているところは、アフリカ人を受身の犠牲者として見るのではなく本来的に歴史の主体であるとして研究してきた点である。

### 3 労働史研究の動向

次に、最近のジンバブエ社会史研究の中の労働史研究を展望しておこう<sup>17)</sup>。ジンバブエの抑圧されてきた階級にとって、その歴史の回復は、闘争の持続力の源泉となるだけではなく、問題を考える上で長期的なパースペクティブを与え、将来の希望の源泉ともなる。ジンバブエの労働運動の歴史は、通常、ナショナリストのエリートの闘いに従属させられてきた。労働運動とその指導者たちは、反植民地闘争の中ではしばしば認識されることはあっても、その運動とナショナリスト政党の成長やナショナリストのイデオロギーとの関係は、ナショナリストの勝利の歴史にふさわしいように単純化された。しかし、最近になって、ようやくジンバブエの歴史記述にもっとオープンで批判的な議論を促進しようとする研究も現れている。考えてみれば、政治の舞台において、独立の闘いは不均等なプロセスであって、そこには世に知られない英雄や意図せざる結果がともなうものである。民族形成の歴史は、選ばれた人々とその歴史の伝統に還元されてはならない。歴史研究には、常に懐疑と再検討がともなうものである。

ジンバブエの労働史を概観してみると、一般的には、1960年のグレイ（Richard Gray）の『二つの国民』（The Two Nations）の出版以来、10年を一区切りとしてそれぞれに特徴が見られた。1960年代には、移民の人種差別主義を分析し、攻撃する著作が支配的であった。グレイの論調は、ウィリアム・バーバー（William Barber）やネイサン・シャムヤリラ（Nathan Shamuyarira）によって増幅された。彼らは、都会であろうと農村であろうと、また工業であろうと農業であろうと、アフリカ人の経験した抑圧を探し出すことに関心があった。その傾向は、先に述べたレンジャーの『南ローデシアにおけるアフリカ人の声』にも見出すことができる<sup>18)</sup>。

これとは対照的に1970年代になると、研究の主流はリベラルなアフリカニズムから人種問

題を階級の問題に包摂しようとするラディカルなマルクス主義に代わっていった。アリギ(Giovanni Arrighi)、ヴァン・オンセレン(Charles van Onselen)、ダンカン・クラーク(Duncan Clarke)は、黒人の労働階級の歴史を追跡した。アフリカ人のプロレタリアート化のプロセスに関するアリギの議論は、クラークやヴァン・オンセレンによってとりあげられた。クラークは、「移民による植民地支配下での資本蓄積」の源泉は「安価な労働システムの創出と維持」であると論じ、ヴァン・オンセレンは、労働者がどのように搾取に抵抗したかを示すことに関心があった。彼の『チバロ：南ローデシアにおける鉱山労働』(Chibaro : African Mine Labour in Southern Rhodesia 1900-1933.)は、鉱山業の費用構造、費用極小化およびこの戦略のもたらした労働者の「賃金や生活条件」への影響を明らかにしただけでなく、コンパウンド制度がどれほど暴力的であり、それに対してアフリカ人鉱夫がどのように闘ったかを明らかにしている<sup>19)</sup>。

このようなラディカル派の見解は、1980年代と1990年代にも持ち越されたが、独立の勝利に酔うナショナリストの支援者によって次第に押し流されていった。階級闘争よりも国家統一と国民形成の方を讀めた研究が現れる。それらによれば、1980年4月以降のジンバブエは、労働者と農民の両方が建設できるすべての世界のうちで最善のものであると祝福されたのである。もちろん、こうした著作とは異なる立場の研究として、バナナ(Canaan Banana)の『混乱と固執』、レンジャーの『農民意識とゲリラ戦争』およびシャドゥール(Mark Shadur)の『途上国における労働関係』があった<sup>20)</sup>。

しかし、今日では、階級分析に関しても意見の不一致は抑えられない。1980年代末以降、ラディカル派のモノグラフや論文が数多く現れ、取り扱われる時代も対象も多様になったが、その中では、フィミスター(Ian Phimister)の『ジンバブエ経済社会史』と『ワンギ・コリア：植民地期ジンバブエにおける石炭、資本および労働』、それにラン(Jon Lunn)の『ローデシア鉄道システムにおける資本と労働』(Capital and Labour on the Rhodesian Railway System, 1888-1947.)が特筆に価する<sup>21)</sup>。

#### 4 都市社会史研究

ごく最近にいたるまで、ジンバブエの都市社会史研究の成果は出版されることも少なく、うもれていたものが多かった。1994年6月にレンジャーの組織した「ジンバブエ都市史研究会議」(Zimbabwe Research Day Conference on Urban History)が契機となって、都市社会史研究に光が当てられることになった<sup>22)</sup>。ジンバブエの都市史研究のテーマは、実に多岐にわたっている。すなわち、都市化のプロセスの中で異なる時期に多様なアフリカ人グループによって形成された都市空間の特質、アフリカ人労働者の定着化と再生産の問題に対する植

民地国家の矛盾した対応、農村での生産や労働過程とエスニシティの間に見られた多様な関係、労働組織や社会組織および「想像のナショナル・アイデンティティ」に対する農村―都市間関係の変動の影響、都市の構造や都市社会の組織形態に対する地域的な労働供給の影響、人種・階級・ジェンダーに沿った都市のマッピングをめぐる人々の対立、「植民地都市」と都市で暮らす人々の闘いのジェンダー性などである<sup>23)</sup>。

ところで、ジンバブエの都市社会史研究の台頭は、南アフリカでの当該研究の興隆と対応する面がある。南アフリカでの研究の主流は、白人の大学や諸外国に逃れて暮らしてきた人々の研究から修正派へ移行している。ただ、1994年以降、南アフリカの政治的経済的現実の移行に直面した歴史研究にはどこか弱いところがあるとの批判が出ている。マムダニ (Mahmood Mamdani) の指摘によれば、南アフリカ白人の左派の現在の危機は、この問題の中に位置づけられる<sup>24)</sup>。これに対して、ジンバブエの都市社会史の研究は、南アフリカとは異なる軌道を描いており、ナショナリストの歴史への批判とラディカル・マルキシストへの批判の二重の遺産から生まれたのである。これは、一方で、ナショナリストの歴史研究の関心が衰えることなく長続きたこと、他方で、ジンバブエのラディカル派の研究だけではなく南アフリカの研究成果も利用されたことに起因している<sup>25)</sup>。

まず、19世紀末から第二次世界大戦後にいたる時代を扱った諸研究から展望する。植民地時代のジンバブエでは、初期の都市居住地（キャンプ、軍事基地、砦）の建設は、植民地支配のための政治経済構造を形成するプロセスの一部であった。都市の構造が発展するにつれて、都市計画の原則としては、差別化や支配が強調された。この原則は、イギリス、ドイツおよびポルトガルの間で共通していた。植民地期南ローデシアにおける「空間の人種差別化」(racialization of space) は、都市社会史研究の重要なテーマの一つである。

1933年に植民地政府は、最初の都市計画局を内務省においた。ヨーロッパ人移民の植民地支配の狙いは、都市労働者の要求と労働の再生産費を一致させることおよび白人都市の概念を堅持するものであった。植民地支配下での都市化の進展において、アフリカ人労働への依存は隔離政策を攪乱するものであった。植民地国家とその支持者（小企業家、鉄道関係者、白人労働者）は、都市は白人のものであり、アフリカ人労働者の実質上の居住地は、郷里の農村であると考えていた。アフリカ人にとって都市空間は一時的な生活の場であり、それにかかるコストはできる限り少なくしようと中央政府は考えた。植民地に入植してきたヨーロッパ出身の人々のイメージでは、アフリカ人の家庭や家族の再生産を確かなものとする場所は農村地区であるとされたのである。その結果、植民地政府の都市政策では、アフリカ人労働者は一時的定住者と規定され、政策の重点は農村に置かれるという矛盾があった。ここでは都市に定住するアフリカ人の賃金労働者はイメージされていない。

このような考え方からすれば、都市政策自体は場当たりのとなる。植民地政策の重点も農村での土地問題に置かれることになった。したがって、初期の植民地政府は、たとえば産業および商業組合(ICU)のような政治組織が農村で運動を始めることには神経を尖らせた。当局は都市社会を区分し、分断する意図を持っていたにせよ、実際には、アフリカ人労働者は都市を自らのものとして飼いなすことができたのである。アフリカ人労働者たちは、自らの意思に基く経済的・政治的・文化的挑戦を通して植民地支配の監視の限界に立ち向かい、都市空間の一部を自らのものとした。

別の見方をすれば、このような植民地政府の都市政策は、南ローデシア植民地国家が一枚岩でなかったことを説明している。すなわち、中央政府が地方行政のレベルでは多様な移民の利害とは対立し、時には従属していたことを示している。この点は、とくに不在地主が投機的な目的で所有していた「プライベート・ロケーション」の状況に見られた。アフリカ人の家族は大都市の近郊にある「プライベート・ロケーション」に住み、男たちはそこから毎日仕事のために通う光景が見られた。このような性格の土地の存在は、1930年代の土地配分法の原則や意図に反した。したがって、ソールズベリーやブラワヨでは、「プライベート・ロケーション」が労働再生産の代替地となり、植民地政府や雇い主は、都市での労働力の定着化と再生産のコストを払うことがなかったのである。このような投機的地主のなかには、アフリカ人に土地を貸していたものもいたほどである。

都市における不安定で一時的な居住は、出稼ぎ労働者の生活に集約される。ソールズベリーやブラワヨのような都市での居住が広がるにつれて、多数の労働者はニヤサランド、ポルトガル領東アフリカ、北ローデシアから流入してきた。他方、南ローデシアの多くの労働者にとって完全なプロレタリアート化を避ける闘いは、農村での生活が持続する限り意味をもった。

1970年代にあらわされた1930年代までのブラワヨに関するスティーブン・ソーントン(Stephen Thornton)の研究は、南ローデシアにおける都市史研究を切り開くものであった。ソーントンは、1893年—1933年のブラワヨでのアフリカ人プチブルの台頭を考察している。南ローデシアではヨーロッパ資本主義の不均等な発展と浸透がプロレタリア化のプロセスを規定し、アフリカ人の蓄積の空間を規定した。彼は、ロケーションにおける小土地保有者の戦略を検討している。賃金労働者のなかには生産手段を求める闘いのなかで、未成熟な都市政策の隙間に蓄積の機会を見出す者も現れた。さらに、彼は、トンガ人の地方自治体労働者に関して、トンガ人の戦闘的な意識の発展や都市労働市場における職業上の地位の低さは、彼らが出身地で直面した土地剝奪という厳しい条件に係わると論じた。ソーントンは、農村での社会関係の厳しい疎外と都市での労働者の職種、組織形態、意識形態を結びつけて考えよ

うとしたのである<sup>26)</sup>。

1980年代末になると、都市社会史研究は吉國恒雄のソールズベリーの研究によって広がった。この研究は、植民地時代初期におけるアフリカ人の都市社会の成長を理解しようとするもので、アフリカ人が著しく困難な条件の中で自ら築こうとした世界を詳細に観察したものである。彼の調査によって、第一次世界大戦中の都市における労働者の抵抗の初期形態だけでなく、ICUとそのリーダーシップの詳細が明らかにされた。最も重要な点は、ソールズベリーにおける多様な出稼ぎ労働の経験が都市およびもっと広い地域の政治に及ぼした影響についての理解が進められたことである<sup>27)</sup>。

吉國の説明によれば、20世紀初頭において、マショナランドのアフリカ人には農村で生活の糧を得る選択はなお可能であったために、彼らは長期的な賃金雇用にもっぱら依存することを避ける余地を残していたのである。それゆえに、都市の組織や政治は、ニヤサランド（マラウイ）、ポルトガル領東アフリカ（モザンビーク）、北ローデシア（ザンビア）出身の出稼ぎ労働者に占められる傾向があった。これとシヨナ人労働者の土地への持続的な強い結びつきが重なり、また、ソールズベリーにおいては南ローデシア以外の地方の出身の労働者が支配的であったこともあいまって、この段階では、シヨナ人の労働者は、ソールズベリーの生活にわずかの投入を試みたにすぎなかった<sup>28)</sup>。以上のように、吉國の研究は、都市における多様な出稼ぎ労働の歴史とこのような出稼ぎが都市の労働組織に及ぼした影響を理解するのに優れた知見を提供したのである。

次に、リチャード・パリー（Richard Parry）は、初期のソールズベリーにおける文化や組織の表現形態を研究した。植民地国家の中心的課題は、イデオロギー的覇権にあるがゆえに、多様な介入を通じて文化が発明され、再構成された。植民地の黒人たちが植民地の権力側の意思に従属させられ、黒人労働者の対応力が押さえつけられたと強調する立場は、植民地社会のダイナミズムを過度に単純化しており、人々の行動の説明としては不十分なものである。ソールズベリーにおける植民地経験から生まれたイデオロギーと文化を検討し、また、それが階級の形成や政治的行動に対してもった意義を考えようとしたのが、パリーの論稿である。そこで論じられたことは、次のようなものであった。第1に、植民地支配のイデオロギーが決して完全なものではなかった。第2に、都市は、対立する諸要素を含みながら捏造され、再構成された多様な文化的制度の発展にとっただけでなく、植民地支配と重要なかわりを持ちつつ代替的な行動と理解の様式の発展にとっても重要であった。第3に、戦前期の黒人の政治的抵抗は、植民地的言説の網の目の中に捉えられてしまうと、ロケーションの社会と文化に触れることができず、植民地支配の経済的およびイデオロギー的基盤を覆すことを狙いとする運動を阻んでしまうこともあった<sup>29)</sup>。

ところで、ジェンダーの分野では、テレサ・バーンズ (Teresa Barnes) とティモシー・スカーネッキア (Timothy Scarnecchia) の研究が注目に値する。バーンズの研究は、アフリカの都市社会内部および女性に関して、植民地政策の変化の中でジェンダーをめぐる複雑な闘争を明らかにしたものである。

アフリカ人女性は、しばしば、家父長制に挑戦した。彼らは、旅をしたり、失踪したり、植民地の法廷を利用したり、自力で金を稼いだり、年長者に対して口答えをしたりした。しかし、植民地時代のアフリカ人女性を家父長制的な抑圧に対して断固として戦った英雄として描くのは誤りであろう。植民地時代のジンバブエの女性たちは、一般的に自らを父や夫や息子たちの将来や希望や考え方や結びついた絆を破壊しようとしたのではない。彼らは、家父長制に真っ向から対立することによってだけでなく、自分の心を最も動かすことのできる仕事を創り出したり実行したりすることでも都市社会の形成に貢献したのである。

このようにして、バーンズは、女性たちが彼らの父や夫たちの家父長制的権威に対して闘ったばかりでなく、男たちとともに植民地政府に対しても闘ったことを明らかにしようとした。彼女は、この点について1940年代のストライキを闘った人たちの要求の中で女性によって提起された重要な問題の分析を通して説明している。

当時支配的であった経済制度が女性にどのような影響を及ぼしたかに関する労働者の理解がストライキに加わる女性の意思にどのように関係していたかを示す証拠は大量に存在する。労働者の要求のリストを見れば、彼らが次第に家族の活力や社会的再生産の問題に関心を向けていったことがわかる。もし女性の役割への考慮がもっと明確になれば、1940年代のローデシアにおけるアフリカ人労働者は経済要求だけをかかっていたのではないことがわかるであろう<sup>30)</sup>。

バーンズは、1940年代と1950年代の植民地期ジンバブエの都市における労働者についてこれまで軽視されてきた側面を明らかにしている。アフリカ人の既婚男性が社会経済闘争において重要な役割を演じてきたとはいえ、男性中心な歴史研究では不満を持つ労働者としての男性の意識に対する女性の影響が無視されてきた。彼女の研究では、1945年の鉄道労働者のストライキ、1948年のゼネスト、1946年の原住民登録法 (Native (Urban Areas) Registration and Accommodation Act) に対するハラレのタウンシップにおける RICU のアジェーションが取り上げられ、アフリカ人の都市社会の再生産のために組まれたプログラムに対する労働者の不満が明らかにされている。ジェンダー関係への理解が政治や経済への取組と織り合わせられていた面を捉えられないような研究は、ジンバブエの反植民地闘争のダイナミズムを正確に説明することはできない<sup>31)</sup>。スカーネッキアの研究も、また、アフリカ人の都市社会内部におけるジェンダーや階級の区分を扱っており、とくに居住空間に関する対立とア

フリカ人コミュニティの中での階級や地位を規定する上でそうした空間の重要性に焦点をあてたものである。1940年代末と1950年代初めのハラレのタウンシップの雰囲気は、既婚と単身の労働者の間、既婚の人々の間、中流階級への上昇を望む人々と出稼ぎ労働者として農村での生活様式を残したままの人々の間で緊張が高まっていた。

スカーネッキアは、アフリカ人労働者の定着化論争の重要な側面として都市環境における女性の位置という問題を扱っている。すなわち、ハラレのタウンシップにおけるアフリカ人居住空間の「立派な態度」(respectability)をめぐるマッピングは、既婚と独身の労働者、安定を望む中流階級と出稼ぎ民の間の対立を示していた。それは、また、1940年代と1950年代のコミュニティの政治を特徴付けた。彼らの間にこのような対立が発展してくると、女性の行動の「受容性」(acceptability)に応じた女性のカテゴリー分けは、台頭しつつあった黒人中流階級の「立派な態度」(respectability)を規定する上で中心的な役割を演じたからである。というのは、1950年代のアフリカ人労働者をめぐる限定された定着化の中で、植民地時代にゆっくりと台頭してきた黒人中流階級は、無秩序な都市大衆と社会的な距離を置くことを求め、また、白人の移民と対等の市民権(citizenship)を主張することで「立派な態度」(respectability)を打ちたてようとしたからである。1948年のゼネストや1950年代のナショナリズムに大衆をひきこんでいったのは、都市人口の多くを占めていたこの階級の発展であった。このように、都市の労働に関するわれわれの理解をすすめるためには、経済および政治のコンテキストだけではなく労働者の闘いの発展に影響を及ぼした社会的および文化的媒介変数を考慮しなければならない<sup>32)</sup>。

近年の研究では、たとえば階級、エスニシティおよびジェンダーというカテゴリーが取り入れられるようになった。その結果、アフリカ人の都市社会の多様な構造、労働者の間にあらわれてくる多様な意識、労働組織や労働移動に影響する要因、労働運動とナショナリストの政治との関係の理解をいっそう進めることができるであろう。

さて、フレデリック・クーパー(Frederick Cooper)の脱植民地化とアフリカ人社会に関する研究によれば、イギリスとフランスの植民地支配が直面した問題は、先に触れたように都市労働力の定着化であった。それは、生産性を改善し、労働者を近代的世界に導き入れるために必要とされたのである。植民地当局にとってアフリカ人労働者が、一方で、無秩序の都市の下位階級(unruly urban underclass)に陥ることを避けねばならなかったし、他方で伝統的後進性(traditional backwardness)の吸引を回避しなければならなかった。第二次世界大戦後の植民地政府の労働政策を特徴づけたのは、この矛盾であった<sup>33)</sup>。

第一次世界大戦後、南ローデシアでは、工業化の進展が見られた。この工業化のプロセスは、フィミスターの研究で概観することができる。産業資本は、もっと安定した労働力を要

求したために、都市労働の不安定性についての調査が行なわれている。その一例として、1944年の高等弁務官報告書があげられる<sup>34)</sup>。

こうした報告書の刊行後、植民地政府が都市のアフリカ人労働者のマッピング、行政および管理の詳細な情報を収集し始めた。調査方法は、19世紀にヨーロッパ列国で開発された諸学問（神学、生理学、経済学、社会工学）の概念に基いて行なわれたが、植民地ではこれらの諸概念に人種の偏見が取り入れられたのである。政府報告書の中に記載された勧告は、労働力の定着化とアフリカ人労働者のための都市環境の整備であった。しかし、政策の実施は、泥沼のような問題にとらわれた。すなわち、中央政府、地方当局および雇い主の間で「誰が住宅や社会サービスを負担するか」について意見の一致が見られなかったからである。さらに、都市の安定化と農村の土地改革は、都市での賃金の上昇に依存したが、これには白人農民、鉱山経営者、白人労働者、それに工業家も反対した<sup>35)</sup>。

労働力の定着化問題に関して移民政府の懸念したもう一つの側面は、都市地域におけるアフリカ人の統治とその代表権の問題である。1952年のホールマン（J.F.Holleman）の原住民局（Native Department）への提案では、地方評議会（Local Council）へのアフリカ人代表の問題が論じられている。政府は、セキ（Seki）とヌタバジンデュナ（Ntabazinduna）に新タウンシップを建設し、このタウンシップに小規模な行政単位をつくる。こうして、限られた範囲の「部族」的・血族的紐帯などに基く内的統一の可能性をつくりだそうとしたが、タウンシップに「部族」ブロックをつくることに反対があった。次いで、1955年には、原住民問題担当官ハウマン（R.Howman）の勧告が出され、都市在住のアフリカ人に対する管理方法として新たな居住計画（new home-ownership housing scheme）の下で政府によるコントロールが提案された。また、政府は、原住民労働局（Native Labour Department）を通して労働組合に接触し、さらに正常な労使関係の樹立を通してアフリカ人労働者を管理しようとした。これは、地方と都市の原住民コミッショナー（Native Commissioner）を Political Officer とし、市当局者と都市在住アフリカ人に協力させるというものであった。しかし、最終的には、この提案は承認されず、ナショナリストや労働組合の運動が植民地国家に敵対する直接的手段を開発するにつれて、この諮問委員会制度（Advisory Board System）は信用をなくしていった<sup>36)</sup>。

ところで、吉國は、都市に対する農村—都市間関係の影響の変化を考察している。彼は、人口の動き、土地、都市政策の変化がどのように都市の文化や政治に影響するのかを明らかにしようとした。また、問題が「全国的になる」プロセスを扱っている。すなわち、1950年代以降、ソールズベリーでは支配的人口であった地域外の出稼ぎ民が、広範な農村—都市間関係を持つ南ローデシアの人々に入れ替わっていく。1950年代には、このような不均等な農

村—都市間関係と植民地の境界を越える農村の闘争との関係の中で地域的なナショナリズムが生まれてくる。したがって、民族の世界観の発展と持続の困難が誇張されてはいけない。とくに都市中心部の労働者に対して「国は白人のものであり、白人が法と秩序を創る」と信じさせると考えていたときはそうである<sup>37)</sup>。

次いで、ブライアン・ラフトプロス (Brian Raftopoulos) は、「ナショナリズムとソールズベリーの労働」と題する興味深い論稿を発表している。チャールズ・ムジンゲレ (Charles Mzingele) の死亡と1950年代のソールズベリーにおける改革産業および商業組合 (RICU)、さらに大衆のナショナリズムの発展は、都市の人口と社会の変化を反映していた。これらの変化は、1950年代における農村の変化の結果、1950年代中頃にはソールズベリーへの労働移動が増加したことを反映している。この時期から初めて都市の地元出身者の数が南ローデシア以外の出身者を上回った。1955年と1965年の間のハラレ青年同盟や後のナショナリスト政党の出現は、都市政治の新しい展開の兆しを示すものであった。RICU は、ロケーションや恒久的に都市に居住する人々に関連する問題に活動を限定したが、ナショナリストの運動の動員戦略には、農村で不満をつのらせていた都市出稼ぎ民が含められていた。この戦略は、全国的動員の広いベースを作り出した。しかし、ナショナリストの運動が次第に台頭しつつあったアフリカ人インテリの中の競合するセクトによって形成されるようになると、都市での他の闘争は、このナショナリストのアジェンダの必要性によって優先順位がつけられるようになる<sup>38)</sup>。

## 5 むすび

近年の研究を概観して、ジンバブエ社会史研究について次のように指摘することができる。ジンバブエの農村社会に関する豊かな研究に加えて、広範で多様で均質ではない移民の植民地支配の経験やナショナリストの遺産をもっと広く検討し、ジンバブエ社会史研究を豊かにする試みはもっとなされていいはずである。その一つが植民地期南ローデシアの都市におけるアフリカ人の経験の研究である。そこには解明すべき多くの問題が残されている。ソールズベリーやブラワヨ以外の都市に対する都市—農村関係の影響、多様な人種別グループの経験を網羅する総合的な都市史、もっと広い地域やグローバルな影響の諸結果を含む都市社会史の研究などである。

現代ジンバブエの都市民は、植民地支配の遺産に直面している。植民地統治官の直面した問題は、脱植民地化時代の政治家たちも直面した。その中には、都市労働者の定着化と持続的再生産、住宅と衛生、交通、地方政府の構造をめぐる問題がある。ジンバブエの都市人口は、1962年の76万人から1982年の194万人に、1997年には427万人に増加した。それぞれ全人

口の19.8%、25.9%、34.7%を占める。

このような人口の増加が経済危機やこの危機に対応する政治力の衰えと重なると、都市の「市民社会」(civil society)が批判的な反対勢力形成の温床となる。1940年代と1950年代以降、都市政治がアフリカ人の闘いの特徴とつながったとき、反植民地闘争の焦点が農村に移動したことは都市におけるアフリカ人の組織政治を周辺化させた。しかし、今日、労働組合、住民組織、市民団体(civic group)、NGO、反対政党の形での都市政治の復活は、ジンバブエの民主政治には歓迎すべきことである。

しかし、都市の社会構造は、フォーマルな部門の労働者だけでなく、インフォーマル部門からも成立しており、今日ますます多くの失業者や貧民が生まれているために都市住民の行動は、しばしばストライキや組織されたデモではなく、暴動の形をとる。過去と同じように都市と農村の再生産の危機が結びつき、それが人口の集中する都市中心部で生じると、一つの個別的な経済危機は群集の暴動になってしまうからである。

最近の研究に共通しているのは、行政上の公式の境界によって規定される範囲を超えて都市の変化を見ることを強調している点である。都市が国民の経済的、社会的および文化的発展に中心的な役割を演じることを前提とすれば、研究および分析の単位としての都市は、ナショナルなそしてグローバルなプロセスにユニークな洞察を与えるであろうし、都市と個人の生活の関係にも独自の洞察を与えるであろう。

都市の歴史を「人口爆発」、「経済崩壊」、「西洋による搾取」というタームで説明することは、複雑なプロセスを単純化するものであり、南部アフリカの諸都市の人々の感情や経験と合致しているとは言えない。都市は、「闘争の場」(site of struggle)であるとともに「革新と変革と再建のダイナミックな場」(dynamic site of innovation, change and reconstruction)でもある。

#### 注

- 1) 「都市化」は、総人口のうちで都市地域に暮らしている人口の割合の増加過程として定義される。これは、都市地域の規模の増大をさす「都市成長」という用語と区別される。本研究で使用される「都市化」は、都市の成長と都市に暮らす人口の増加に伴って生じる社会的経済的変化を含めて考えられている。C.M.Becker, A.M.Hamer & A.R. Norrison, *Beyond Urban Bias in Africa : Urbanization in an Era of Structural Adjustment*, London, 1994.を参照。
- 2) アフリカにおける「植民地都市」については、D.Simon, *Cities, Capital and Development : African Cities in the World Economy*, London, 1992, pp.21-29.また、イギリス帝国における植民地都市の建設については、ロバート・ホーム著・アジア都市建築研究会訳「植えつけられた都市—英国植民都市の形成—」京都大学学術出版会、2001年(Robert Home, *Of Planting and Planning : The Making of British Colonial Cities*, London, 1997.)を参照。
- 3) F.Cooper, *The Struggle for the City*, Beverley Hills, 1983, p.27.
- 4) この点を論じたものとして、たとえば M.Lipton, *Why Poor People Stay Poor : Urban Bias in World*

- Development*, Cambridge, 1976.を参照。
- 5) World Bank, *Urban Policy and Economic Development, An Agenda for the 1990s*, United Nations Development Programme, *Cities, People and Poverty*, Urban Development Cooperation for the 1990s, United Nations Centre for Human Settlement (Habitat), *Global Strategy for Shelter to the Year 2000*. などがある。
  - 6) 最近の南アフリカにおける都市史研究ではこのような点が議論されている。Paul Maylam, “Explaining the Apartheid City : 20 Years of South African Urban Historiography”, Susan Parnell & Alan Marbin, “Rethinking Urban South Africa”, *Journal of Southern African Studies*, Vol.21, No.1, March 1995, pp.19-38, 39-61.
  - 7) 都市におけるアフリカ人の経験に関する諸研究と並んで、ヨーロッパ系人、インド系人、カラードの都市社会の歴史的経験についての研究も行なわれている。B.Freund, *Insiders and Outsiders : the Indian Working Class of Durban in the Twentieth Century*, 1994, E.P.Stal, *Afrikaners in die Goudstad, Deel I, 1864-1924*, 1978, *Deel II, 1924-1961*, 1986, I. Goldin, *Making Race : The Politics and Economics of Coloured Identity in South Africa*, 1987, Vvian Bockford-Smith, *Ethnic Pride and Racial Prejudice in Victorian Cape Town*, Cambridge, 1995, P. Harries, *Work, Culture and Identity : Migrant Labourers in Mozambique and South Africa, 1860-1910*, London, 1994.を参照。
  - 8) 筆者が、南部アフリカ社会史研究の動向を整理してみようと考えようになったのは、フィミスターの論稿 (Ian Phimister, “Comrades Compromised : The Zimbabwean and South African Liberation Struggles Compared and Contrasted” *Journal of Historical Sociology*, Vol.8, No.1, March 1995.) に負うところが大きい。
  - 9) 彼が行ってきたこれまでの研究の概観は、“Concluding Remarks” (in A.H.M.Kirk-Greene ed., *The Emergence of African History at British Universities*, Oxford, 1995.) から知ることができる。出発点となったアイルランド史研究とは、“Strafford in Ireland : A Revaluation” *Past and Present*, 19, 1961, reprinted in T. Ashton ed., *Crisis in Europe, 1560-1660*, London, 1967.を指している。
  - 10) “Taking Hold of the Land : Holy Places and Pilgrimages in Twentieth Century Zimbabwe” (*Past and Present*, 117, 1987, pp.158-194.)
  - 11) J. McCracken, “Terry Ranger : A Personal Appreciation”, *Journal of Southern African Studies*, Vol.23, No.2, June 1997, p.177.
  - 12) *Ibid.*, p.180.レンジャーは、これらの研究者の協力をえて、学生を対象にしたアフリカ史のコースにもっとも力を入れた。それ以外には、「工業国家の興隆」、「歴史家と革命」、「植民地主義とナショナリズムの比較研究：インドとアイルランド」のコースがおかれた。彼は、興味深いことに、「アイルランドとアフリカ」の比較に関心を持ち続けていた。それは、ロジャー・ケースメント没後50年を記念する雑誌 *Transition* (1966年)に「ロジャー・ケースメントとアフリカ」 (“Roger Casement and Africa”, *Transition* (Kampala), 26-3, 1966, pp.24-26.) と題する一文を寄せていることから知られる。
  - 13) T.O.Ranger ed., *Emerging Themes of African History*, Nairobi, 1968.を参照。また、三編著とは、T.O.Ranger ed., *Aspects of Central African History*, London, 1968, I.N.Kimambo and A.J.Temu eds., *A History of Tanzania*, Nairobi, 1960, G.Kibodya ed., *Aspects of South African History*, Dar es Salaam, 1969.である。
  - 14) それらの成果の一部は、以下の通りである。*Dance and Society in Eastern Africa, 1890-1970*, London, 1975, *State and Church in Southern Rhodesia, 1919-1939*, Salisbury, 1961, *Themes in the Christian History of Central Africa*, London, 1975 (with J. Weller), *The Church and Healing*, Oxford, 1982 (with W.Shields).

- 15) *African Religious Research* のサブタイトルは、*A Newsletter for the Historical Study of African Religious Systems in East, Central and Southern Africa* となっている。これは、1971—1975年までフォード財団の援助を受けた研究プロジェクトであった。
- 16) オックスフォード大学の教授就任講義、*Rhodes, Oxford and the Study of Race Relations*, Inaugural Lecture, Oxford, 1989. J. McCracken, *ibid.*, 182-184.
- 17) もっとも新しい通史的研究としては、Brian Raftopoulos & Ian Phimister eds., *Keep on Knocking : A History of the Labour Movement in Zimbabwe, 1900-1997*, Harare, 1997. をあげることができる。
- 18) R. Gray, *The Two Nations*, London, 1960. N. Shamuyarira, *Crisis in Rhodesia*, London, 1965.
- 19) G. Arrighi, "Labour supplies in historical perspective : a study of the proletarianization of the African peasantry in Rhodesia", *Journal of Development Studies*, 1970. アリギの批判対象となったルイス・モデルについては、峯 陽一「現代アフリカと開発経済学」日本評論社、1999年、35—47ページを参照。D. Clarke, "The political economy of discrimination and underdevelopment in Rhodesia with special reference to African workers, 1940-1973", University of St. Andrews, Ph.D., 1975. C. van Onselen, *Chibaro : African mine labour in Southern Rhodesia 1900-1933*, London, 1976.
- 20) C. Banana, *Turmoil and Tenacity : Zimbabwe 1890-1990*, Harare, 1989. M. Shadur, *Labour Relations in a Developing Country*, Avebury, 1994. シェドゥールの主張は、次のようなものである。すなわち、政府は、ストライキなどの敵対行動が経済発展の害になるとして説明する。もし多数派の政府が統治できないとすれば、独立のために闘ってきた目標—土地改革、雇用創出、人種差別の終焉—の達成は危うくなる。労働者の主張は幅広い国益に照らして考えられねばならない。
- 21) I. Phimister, *An Economic and Social History of Zimbabwe, 1890-1948*, London, 1988, *Wangli Kolia : Coal, Capital and Labour in Colonial Zimbabwe*, Harare, 1994. J. Lunn, *Capital and Labour on the Rhodesian Railway System, 1888-1947*, London, 1997. なお、フィミスターの紹介としては、北川勝彦「南部アフリカ社会経済史研究」関西大学出版部、2001年、173-184ページを参照。
- 22) この会議に提出された諸論文は、ラフトプロスと吉國によって編集され、Brian Raftopoulos & Tsuneo Yoshikuni eds., *Sites of Struggle : Essays in Zimbabwe's Urban History*, Harare, 1999. として出版された。
- 23) Brian Raftopoulos & Tsuneo Yoshikuni, *ibid.*, pp.1-2.
- 24) M. Mamdani, *Citizenship and Subject : Contemporary Africa and the Legacy of Late Colonialism*, Cape Town, 1996. を参照。
- 25) このような研究の展開は、成果の豊かな農村の歴史研究との対話の中で生じた。農村社会史の研究では、テレンス・レンジャーの著作だけでなく、人類学者の研究が特筆に価する。これとの関連で、1950年代の都市研究を支配してきた人類学者や社会学者の著作が1980年代と1990年代の都市史研究に同様の成果を生んでいないことを考えると興味深いものがある。
- 26) S. Thornton, "The Struggle for profit and participation by an emerging petty-bourgeoisie in Bulawayo, 1893-1933" in Brian Raftopoulos & Tsuneo Yoshikuni, *Sites of Struggle*, pp. 19-52.
- 27) T. Yoshikuni, "Black Migrants in a White City : A Social History of Harare, 1890-1925", University of Zimbabwe, Ph.D., 1989. T. Yoshikuni, "Strike action and self-help associations : Zimbabwean worker protest and culture after World War I", *Journal of Southern African Studies*, Vol.15, 1988-89, p. 440-468.
- 28) 吉國は次のように説明している。「町のリングフランカは、チニャンジャであって、チショナではなかった。ダンス音楽や他のリクリエーション文化の形態は、強い北部好みであった。そして、第一次世界大戦後雨後のたけのこのように生まれてきた公式の相互扶助組合はほとんどもっぱら外国人労働者の作

ったものであった。」また、「町の内側(インナータウン)、とくにロケーションには、全体としてみれば外国人や教育のない人間や力もなく都市に生活のベースをおいている人たちがいた。一方、町の外側(アウトータウン)とくに郊外の居住区には、アフリカ人で、キリスト教徒で、「態度も立派で」、農村を志向している人たちがいた。」「他方、町の外側は、アフリカ人の近代政治の揺籃の地となった。たとえばローデシア原住民協会や南ローデシアバンツール会議がその代表例である。これらの組織とソールズベリーは緊密な関係にありながら、このエリートの運動はほとんど移民の町に固有な社会対立と呼応しなかった。むしろこの運動は、国中に散らばっている教育を受けた人々や進歩的な農民のための共通の政治的フォーラムとして重要な役割を演じた。」(T.Yoshikuni, "Black Migrants in a White City")

- 29) R.Parry, "Culture, organization and class : the African experience in Salisbury, 1892-1935", in Brian Raftopoulos & Tsuneo Yoshikuni, *Sites of Struggle*, pp.53-94. "The Durban System and the limits of colonial power in Salisbury 1890-1935" in J.Crush & C.Ambler eds., *Liquor and labour in Southern Africa*, Ohio, 1992.
- 30) T.Barnes, "'So that a labourer could live with his family' : Overlooked Factor in Social and Economic Strife in Urban Colonial Zimbabwe, 1945-1952", *Journal of Southern African Studies*, Vol. 21, No.1, 1995. "Am I a man? : gender and the pass laws in urban colonial Zimbabwe, 1930-80", *African Studies Review*, Vol.40, No.1, 1997.なお、バーンスには、以下の学位論文がある。"We women worked so hard' : Gender, labour and social reproduction in colonial Harare, Zimbabwe, 1930-1936", University of Zimbabwe, Ph.D., 1993.
- 31) T.Barnes, *ibid.*, pp.95-113.
- 32) T.Scarneccia, "The mapping of respectability and the transformation of African residential space", in Brian Raftopoulos & Tsuneo Yoshikuni, *Sites of Struggle*, pp.151-162. "Poor women and nationalist politics : alliance and fissures in the formation of a nationalist political movement in Salisbury, Rhodesia 1950-56". *Journal of African History*, Vol.37, 1996. "Mai Chaza's guta re jehova (city of god) : gender, healing and urban identity in an African Independent church", *Journal of Southern African Studies*, Vol.23, No.1, 1999.スカーネッキアには、以下の学位論文がある。"The Politics of Gender and Class in the Creation of African Communities, Salisbury, Rhodesia, 1937-1957", University of Michigan, Ph.D., 1993.スカーネッキアによると、これらの対立(緊張)は、しばしば、アフリカ人が、具体的にはアフリカ人女性が都市でどのように生きるべきかに関連する「立派な態度」(respectability)や「道徳性」(morality)を反映していた。都市における女性の立場をめぐる対立は、時には、植民地国家に敵対する都市での戦いの醜悪な部分となった。というのは、新しく建設された女性用のホステルで暮らしていた女性の場合、1956年のバスボイコットの時、レープされるという事件が起こったからである。
- 33) Frederick Cooper, *Decolonization and African Society : The labour question in French and British Africa*, Cambridge, 1996, pp.1-20.
- 34) I. Phimister, *An Economic and Social History of Zimbabwe, 1890-1948*, London, 1988, pp.239-258. なお、Southern Rhodesia, *Report of the Committee to investigate the economic and social health Condition of Africans Employed in Urban Areas*, 1944.参照。
- 35) Southern Rhodesia, *Report of the Commission into the Recent Disturbances in the Colony*, 1948, Southern Rhodesia, *Report of the Urban African Affairs Commission*, 1958.などを参照。
- 36) Brian Raftopoulos & Tsuneo Yoshikuni, *Sites of Struggle*, pp.8-10.1950年代には、このような定着化の試みの中で、都市労働者に関する人類学および社会学的研究が数多く登場した。アフリカ人の都市への適応(Adaptation Tradition)を研究したのものとして知られている研究者としては、ジョルジュ・

- バランディエ (George Balandier)、マイケル・バントン (Michael Banton)、クライド・ミッチェル (Clyde Mitchell)、エプスタイン (A.C.Epstein)、フィリップ・マイヤー (Philip Mayer)、ケネス・リトル (Kenneth Little) があげられる。これらの研究では、アフリカ人たちが新しい都市の環境の下で彼らの「伝統的」な宗教、文化、シンボルを編成していく手段の創造性が示された。アフリカ人がどのようにして都市の近代的な社会的ネットワークに対応するか、また、一方で、合法的な「部族」的権威を継承するシンボルが地理的空間のネーミングとどのように結びついていくのかが検討された。(C. Vidrovitch, "The Process of Urbanization in Africa" *African Studies Review*, vol.34, No.1, 1991.)
- 37) T. Yoshikuni, "Notes on Influence of Town-Country Relation on African Urban History, before 1957: experiences of Salisbury and Bulawayo", in Brian Raftopoulos & Tsuneo Yoshikuni, *Sites of Struggle*, pp. 113-128.しかし、マムダニの「二元的植民地国家 (bifurcated colonial state)」の概念によると、植民地支配の下に置かれた人々は、農村と都市では異なる植民地経験を持ち、市民とその従者という二極に分解されている。これは、植民地的従属の二元論を受け入れる試みと言える。M. Mamdani, *Citizenship and Subject: Contemporary Africa and the Legacy of late Colonialism*, Cape Town, 1996, pp.16-23.
- 38) B. Raftopoulos, "Nationalism and Labour in Salisbury, 1953-1965", *Journal of Southern African Studies*, Vol.21, No.1, March 1995, pp. 79-93. rep. in Brian Raftopoulos & Tsuneo Yoshikuni, *Sites of Struggle*, pp. 129-150.ブライアン・ラストプロスによるいくつかの研究は、1945年以降の時期の農村と都市の歴史においてナショナリズムと労働運動の間の政治的およびイデオロギー的關係に焦点をあてている。この研究の進展には次のような前提がある。1950年代中頃から1960年代初期において都市地域に人口変動が生じ、その結果、アフリカ人が数の上で優勢となった。この変化は、農地の破壊的な変革(1954年の土地耕作法)の結果として生じたが、そのために地方のアフリカ人が都市に多数移動してきたからである。この変化には、アフリカ人中流階級のインテリ層の増加が伴った。彼らはナショナリストのイデオロギーを都市と農村の両方にまたがって広げた。このナショナリストの運動は、厳密な意味での都市を基盤とする運動に支えられた。その中には、チャールズ・ムジンゲリに率いられた RICWU のような運動があり、また、1945年から1950年代初期までソールズベリーのアフリカ人政治を支配した運動があった。ナショナリストの政治は、1950年代中頃から現れた南ローデシア労働組合評議会と結びついた。ナショナリストの運動では批判的な労働者の声は次第に周辺へ追いやられた。解放闘争が農村地域に移動するにつれて労働運動の役割が一層過小評価されるようになった。このような分析の傾向は、ヘンリー・モティベ (Henry Mthive) によって批判されている。(T.H.Mothibe, "Organized African Labour and Nationalism in Colonial Zimbabwe, 1945-1971", University of Wisconsin, Ph.D., 1993.) 彼は、次のように語る。「組織された労働はプチブルのナショナリズムに従属しなかった。むしろ組織された労働はナショナリストの台頭の中心部を占めた。これは、植民地社会におけるアフリカ人の構造的な位置を一部反映しており、一部はアフリカ人労働の指導的役割を反映している。」モチベの議論は、たとえばベンジャミン・ブロンボの伝記を書いたヌグワビ・ベベのような歴史家によって始められたナショナリストの歴史研究の枠組のなかにある。(N. Bhebe, *Benjamin Burombo: African Politics on Zimbabwe, 1947-1958*, Harare, 1989.) ランは、ジンバブエにおいて形成途上のこれらの異なる階級間の対立を分析している。ランの関心の重点は、ゼネストがナショナリストの勝利主義かあるいは階級的裏切りの共謀理論のいずれかに簡単に同化されるのを避けるために検討を加える点にある。ランの研究は、1948年までの研究の流れを明らかにすると同時にまた残された注目すべき課題を示したという点で重要である。(J. Lunn, "The Meaning of the 1948 General Strike in Colonial Zimbabwe", Brian Raftopoulos & Tsuneo Yoshikuni, *Sites of Struggle*, pp.163-182.)